



第三十六号

「ファミリーコンサート」

メルマガnoichi36号、今回のテーマは「ファミリーコンサート」。
毎年5月最後の水曜日は、唯是震一ファミリーコンサートが開催されます。
緊張する舞台上のファミリー。
ファミリーの今日があるのも、
それを見守ってきた温かいお客様があってこそです。

毎年5月の最終水曜日は、我が一族が主催する演奏会『ファミリーコンサート』があります。

この機会に改めて御紹介させて頂ければと思います、簡単に会の概要を書かせて頂きます。

まずはじめに、ファミリーコンサートの登場人物をご紹介します。

当一族は…そう、一族とはいったものの、そこには3つ家系が交錯しています。

中島雅楽之都を頂点とする中島家。

その娘である靖子が嫁いだ唯是震一を主とする唯是家、

二人の間に生まれた子供が長女・一子と次女・雅枝です。

一子が嫁いだ奥田敦也の奥田家、その長男に私奥田雅楽之

一がおります。

唯是震一、中島靖子（本名…唯是靖子）、
中島一子（本名…奥田一子）、唯是雅枝（本名…唯是知子）、奥田雅楽之一（本名…奥田智之）

この五人がいわゆる“ファミリー”に該当します。雅楽之一の続柄で表記すると祖父、祖母、母、叔母に当たる面々です。

ファミリーコンサート。そのルーツは、祖父母が結婚した頃にまで遡ります。当時、結婚を機に二人は『ジョイントリサイタル』を開催し日本全国を縦断しました。ジョイントリサイタルに続き、一九七〇年『唯是震一リサイタル』が始まります。古典、新作、いずれにおいても当時の名人と称された方々をゲストに迎え、話題性の高い公演を毎年行いました。祖父はリサイタルを十回で区切りとし、娘たちの成長に伴って一九八七年『ファミリーコンサート』の開催へと移行していきます。

末裔の雅楽之一が参加出来るようになったのは二〇〇一年から、唯是震一師と一対一で演奏する『五段帖』でデビューしました。屏風の前に男二人黒紋付姿で演奏する舞台は、女系の一族にあって新鮮な光景であったと、



後に聞いたお客様からのご感想を思い出します。

以降、年に一度の勉強の場と定め私は研鑽を積み、多くの恵まれた経験をさせて頂きました。尺八の青木鈴慕先生、故・山本邦山先生、胡弓に故・森雄士先生、素晴らしい先生方との共演を同公演で果たし、今となっては一生の思い出です。

ファミリーコンサートの秘話を少しご紹介します。ファミリーコンサートは日頃から馴染みのあるお客様にとつて、ファミリーが揃って演奏する“和やかな会”であるよう企画・制作されてきた背景があります。しかし、実際演

[↓次ページにつづく](#)



の中でもよく笑い話にされますが、時によってこの会議は数時間掛けて議論することもあり、音楽一家ならではの思想と感情の交錯があります。会に向けた諸々の事務仕事は全て酒井氏がして下さいます。DMやチケットが五月初旬に刷り上がり、連休明けには皆様のお目に留まるようになります。

震一、靖子はもちろん、一子、知子、そして私の友人知人がお客様としてご来場頂ける舞台上からの特別な景色も、主催者側にとっては面白い現象です。

終曲の演奏が終わりますと、舞台上で花束が出演者全員に手渡されます。お役目はいつも正派音楽院の学生です。

ファミリーコンサートといえば、開催当初からずっとご出演をお願いしてきた故・山本邦山先生が存在が欠かせませんでした。震一、靖子にとつてかけがえのない音楽のパートナーであった邦山先生は、ファミリーコンサートの日には当たり前のように舞台にいて下さり、ファミリーにとつて特別な、かけがえのない共演者でした。私にとつては幼少から可愛がって頂いた身近な大先輩であり、いつも目標にしてみました。家族の成長をお見守り下さり、舞台上では未熟な私を引っ張って下さり、時には祖父の新作が本番前日に仕上がるような急場もあったのですが、誰よりも正確に譜面を読み、作品に忠実な邦山先生は演奏家の鑑でした。

今改めて、先生の存在の大きさと感謝の想いが溢れます。

となります。唯是震一は九十歳、中島靖子は八十八歳で迎える集大成のファミリーコンサートは、同会を長らくお見守り下さいましたご来場のお客様、正派会員の皆様と感動をお届けできますよう、今年も精一杯演奏させて頂く所存です。

奏する側にとつては「和やか」なものとはほど遠く、年に一度の主催公演は緊張を強いられる舞台で、真剣に勉強しなければ恥をかく恐ろしい場と位置づけられてきました。二月下旬になると、祖母が口火を切つて小金井の自宅にファミリーが集合、通称「家族会議」が開かれます。ダイニングの丸テーブルを囲み、酒井帥山氏（唯是震一秘書）司会進行のもと、メンバー全員に白い紙と鉛筆が配られます。

- ・〇〇と△△を演奏したい
- ・最後に全員で演奏する曲は「△△」

主にその二点を書き、酒井氏がまとめて読み上げて、それから全員の意見をすり合わせます。

例えば私の場合

「靖子と夜々の星を演奏させて頂きたいです」

「終曲は全員で八千代獅子を希望します」といった感じになります。

芸術一家は「なかなか会話が噛み合わない」とファミリー

ファミリーコンサートは今年で二十七回目



邦楽の爾今

「爾今」という言葉をご存知でしょうか。「今から後」を意味する言葉で、道元禪師も使われた言葉だそうです。少し前の流行語で言うところの「いつやるの？今でしょ！」みたいなものでしょうか？

私がこの言葉と出会ったのは池袋の「三春駒」という日本酒の名店でした。尺八仲間と演奏会を企画するために意見交換会を催した際に注文した三重のお酒の銘柄です。この言葉に出会い、今生きる者が出来るというのは、まさに爾今を精一杯生きる事であることを実感しました。過去に学び、爾今を歩むことこそ生命の根本であると感じたのです。

邦楽界の爾今は、愛好者人口の高齢化と減少が大きく問題視されていますが、世界中の音楽愛好者人口はむしろ以前より格段に多くなり、様々な形態で楽しんでいるように感じます。これは出版などの分野でも同じ事が起きていて、雑誌や新聞は売り上げが減少していますが、インターネットをはじめとした手段で、同等、もしくはそれ以上の情報量を人々が手に入れる事が出来ます。つまり音楽や情報そのものが求められなくなった訳ではなく、それを楽しむ環境自体が変わっただけなのです。この環境に適応していく事が邦楽界の一つの課題であると感じています。

今から十数年前に「芸術の未来を考える」という母校の学園祭でのシンポジウムで、油絵専攻の学生がパネリストにこんな質問をしました。「僕は小さい頃から友達の家遊びにいつて油絵が壁に掛かっているのを見た試しがありません。将来どうしたら良いでしょうか？」当時は会場中が大爆笑でしたが、非常的に的を射た質問であると感じました。これと同じ事が邦楽にも正に起きていたのです。



Illustration: morimoe

身の回りに邦楽を感じる環境が社会の中や過程の中にあまりない時代が続いてきましたが、ここ数年でずいぶん増えてきているように感じます。更に身近な音を和楽器で奏でたらどうでしょうか？携帯電話の着信音、自動車のクラクション、駅の発車ベル、夕方に自治体から流れる時報などなど…

邦楽の爾今のあり方について考える時にもう一つ大切なのは、こういった時代背景をもとに、人々が何を求めているかを感じつつ、新たな価値観を提示することであると思います。この「新たな」というのは、何も過去にないものではなく、過去にあったものをもう一度見つめ直す事でも成り立ちます。このことはファッション業界などがその実例であり、食の分野などにおいても近年この現象が起きています。「温故知新」と「爾今」のこの二つの言葉を旨に毎日を大切に過ごしていきたいと思えます。

数回に渡って本欄に四方山話を自由につぶやいて参りましたが、今回でひと段落となります。呑みながら楽しくお話しするのは違い、文字に残すということは思いの外難しい事であると痛感しました。

また何処かで皆様にお目に掛かれる日を楽しみにするとともに、メルマガの益々の発展を祈念します。

◎あとがき◎

戦後五十年以上が過ぎて、みんな食うに困らなくなったのはいいのだが、あちらこちらが制度疲労を起こしている、いわゆる縦割りの社会になってしまった。それは身近にもあることで、自由な世界と思われがちなデザインや美術の業界でも事情は変わらない。広告の人は広告ばかり、装丁家は本のデザインしかやってないというのが最近の傾向。戦後の日本ではまだデザイナーという言葉もなかった。その頃は日本画家が装丁を引き受けたり、ポスターを作っている人が舞台美術も担当するのも普通の話だった。

そこで、昔のサロンみたいな横のつながりがどの業界でも必要なんだと思っている人は少なくない。縦割りになってしまった世界をもう一度つなぎ直せば、何かいい変化が起きるような気がする。

ファミリィーという言葉にはいくつかの意味がある。血のつながった家族はもちろん、一門とか同士とか。広い意味での奥田ファミリィーがこれから様々な業界の方と出会って、邦楽以外にも広がりを持っていけたら、こんなにうれしいことはない。

グラフィックデザイナー (http://www.1368.jp) みやはらたかお

